

# 支部便り

平成22年3月 みつわ会東北支部

盛岡のシンボルになっている岩手銀行中ノ橋支店は、保存建物と重要文化財に指定されています。

明治44年（1911年）に旧盛岡銀行として建てられ、東京駅の設計者でもある葛西萬司（平泉生まれ）によるものです。赤レンガ造りに緑のドーム、ルネッサンス様式で、格調高くそびえています。（大矢）



## 3月の行事



支部

3月4日（木）午後4時～幹事会

通常は「二水会」に合わせて第2水曜日に設定していましたが、今までのところ、参会者が幹事会終了後の幹事に止まっていて、その意味を成しません。幹事会の開催日と、二水会の存続については幹事会で検討します。今回は都合により 3月の幹事会を第1木曜日とします。

3月25日（木）12時～例会（昼食会）「しゃぶ禅」

みちのく損保

3月11日（木）1時30分 3役部長会

## 早春二題

佐藤友彦



榴ヶ岡天満宮



福寿草



「新年号」で登場願ったF留学生とは、I研究生の紹介で2009年1月初旬に国際センターで会い、その

日本語の自然さに驚いたことに触れた。

さて、彼女の志望は、東北大学の大学院文学部宗教学である。私と会う前に、すでに、I研究生の手引きで東北大学大学院文学部研究生として当該研究室に出入りが認められている。正式に大学院生、博士課程前期（修士）課程に入るには、当該入学試験に合格する必要がある。

当時、当人の考えていた研究テーマは、「自殺論」であった。自殺といえば、文芸界の自殺者の顔が浮かぶ。古いところで、芥川龍之介、戦後は、三島由紀夫、川端康成、太宰治など。また、自殺者の多い日本の昨今、この辺の興味かと思ひ、すでに始まっていた日本語の個人レッスンでは、その周辺の話を探り上げたり、また中国の女子大の日本語学部での様子などを話題にしながら、何がこの学習者に役立つか、テーマ、テキストをどうするかなどを模索していた。

日頃、人並みに元朝参りをし、彼岸、お盆には墓参をするという慣わしにしたがって、云わば宗教的行事を節目に日を送ってきたものの、も

し信奉する宗教はと、尋ねられた時は、同胞にはせいぜい何宗ですかと聞かれることとは違い、どう答えたらいいか、簡単にはいかない。また、外国の人とレストランに入る前に、メニューに食べられるものがあるかを確認するような時に、わが身を振り返る。外国人との交流には、政治、宗教の問題には、あまり立ち入らないようにしているが、雑談の中でたまたま触れる場合があるし、逆に日本人一般の宗教観について聞かれる場合があり、何かの折に買い求めていた本、例えば、山折哲雄（国際日本文化研究センター所長）の「日本の心、日本人の心」、梅原猛（石巻出身・京大哲学科卒）の独特の神道、仏教観の著作、大隅和雄（東京女子大学教授）の「日本の文化と思想」等、神道、仏教関連のものを再読して一般的知識として紹介することがある。

また、最近、自費出版の句集、歌集が贈られ、中に、山上憶良のように、なにげない身近な生活を率直にそして心情溢れる歌に詠みあげているのに、心が動かされることも再々ならずあり、また高校の同期生に、万葉歌風の短歌会の幹部となっていて、技巧に走らず自然の心のままに表現する万葉集のあり方を、現代の短歌に蘇らせるべきとの信念を披歴されたりするときには、手許にある「万葉びとのことばとこころ」（NHK文学の世界、藤原茂樹；

慶応義塾大教授、坂本信幸；奈良女子大大学院教授）などを取り出し、これを契機に、万葉仮名による代表的和歌を読み始めていた。その関連で、古事記にも、風土記との関連の中で、多少、解説文片手にチャレンジを試みていた。勿論、F生の研究テーマに触発されたことも大きい。

一方、研究テーマの設定に腐心していたF生にも、転機が訪れていた。それは、「自殺論」のテーマは、かなり広範囲であり、多くの先行論考があるので再考すべしとの指導教授の示唆があったことである。

2月となり、正式の大学院入試の時期を迎えたF生は、大まかに言って、日本語能力、宗教学研究に適性かを中心に、テスト担当委員（研究室の教授グループ）の判定に委ねられた。その時期には、古事記、日本書紀に興味を抱き続けてきたこともあり、「日本の神話論」を、大学院の研究テーマとして取り上げようとしていた。そして、記紀の後を受けて、編成された「風土記」に視点をおくことになる。

「風土記」は、元明天皇が713年詔により諸国の政庁に、郡名の由来・伝承・産物・土地の状態等を記す地方史の編纂を命じて、成ったものであるが、現存は、出雲・常陸・播磨・豊後・肥前の5ヵ国のみで、完本は出雲のみである。

大学院の入試テストの結果については、研究室での日頃の真摯な態度や日本語能力に触れているテスト委員に

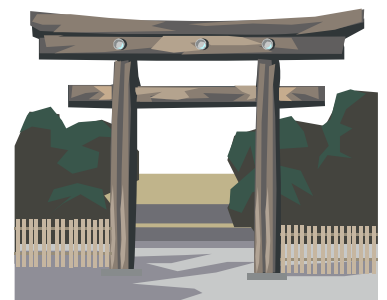
とっては、一般的な学卒者に課せられるテストは、形式的なものであろうと、内心は合格疑いなしと気に病むことはなかったが、それでも、2週間後のある日、正式に合格通知が家に届きましたと嬉しそうに話してくれたときにはホッとしたのは事実である。

聞けば、テストの内容は、研究内容の発表の使用言語の日本語について、であり、講義内容の聴取、論文作成、小論文の口頭発表等に支障がないか、面接では、家族について、或いは、授業料の支払い、居住関係など、そして研究テーマについての質問に終始していたとのことで、事前の研究室での言動は、指導教授達に十分認識されている点でかなり有利であった。

3月に入り個人指導の基本テキストに加藤周一著の「日本文学史序説」を提案し賛意を得た。母校の大学の図書館には、日本文学関連の蔵書が少ない実態や、また教授による日本文学の紹介が夏目漱石の2、3の作品にとどまるなどを聞き、日本文学についての予備知識こそ今後の研究室生活の基礎的知識として必要と判断した上でのことである。

晴れて、院生として、研究室の空気にも慣れ、彼女は、自身の研究課題について、なお検討を加えながら、日本の風俗・神話が専門の指導教官のアドバイスを受けていた。

ほぼテーマも固まり文献によ





る事前調査が済んだところで行動を開始した。“行動を開始した”という表現が適切である。入学して3カ月後の7月、鳥取県“出雲の国”に直行し、出雲神社、その周辺の神社・付属施設等の実地調査に着手したのである。その調査は、地元の神官、有識者にも面接取材したもので、3、4日程度の滞在であるが、帰仙後即論文相当の報告書が、指導教授に提出された。

指導教授が、フィールドワーク創始の京都大学出身であり、いまや、類人猿研究の手法が文系分野にまで浸透しているとは言え、留学の院生が、このように積極的な実践に及んだとは、研究室の異変とされたことは想像に難くない。この“研究意欲”の強さが、教授陣に強く印象付けられたに違いない。その調査報告書は、「神々はな

ぜ出雲に行くのか～  
神の国出雲をめぐる  
考察」である。



3月となり、時あたかも、加藤周一の死去が報じられ、その葬儀

を機に世の識者より、彼の偉業を称揚する多くの文が、新聞雑誌等に掲載された。

週一回のレッスンが続けられ、当方も「文学史序説」の内容の吟味を始めた。余談であるが、「出雲風土記」についての第1回目の調査報告書を、後で見ると、その文体の特徴は、息の長い文章であり、接続詞の使用が殆んど無い。これは、接続詞がない場合でも文意の連続性が、文相互間に円滑に流

れていればそれでいいので、その意味では日本文の作成にはかなり慣れていている。接続詞があまり使えないということもある。また慣用語の表現が不十分な点がある。研究課題の内容には、原則として立ち入らないが、文章作成上の不適切な表現にはアドバイスを。本書のレッスンの主眼は、日本文学史上のその時代の代表的文芸作品の書名そのものの発音とその作品の概要の紹介である。

2009年11月研究テーマ「出雲風土記」の調査研究に、再度の出雲訪問を果たした。事前調査と訪問先での行動は前回の研究訪問とは違い厳密で積極的なものであった。2週間以上の滞在となった。

個別レッスンでは、集合教育（教室での複数学習者への同時授業）とは違って、学習者の日本語習得のレベル・状況に応じたレッスンが可能で、また、レッスンの合間の雑談にも、故国・世界の出来事についての院生世代の考え方や情報把握の仕方、ときには意見交換にも及ぶことがあり、興味深いものがある。これまでかなり詳しく留学生の来日から大学院入学、その研究生活の一端と個人レッスンの一部を紹介したが、機会があれば、西洋・東洋を問わず日本語を習いたい各国からの老若男女の集まる日本語相談室でのボランティア日本語教師の模様を話してみたい。

